



第六十九回

いしやまほんがんじ
石山本願寺

～10年にわたって信長と戦った寺～

山本 忠博

今回ご紹介する石山本願寺は、名称から察せられるとおり、お寺です。“シリーズ城”なのになぜお寺を？と、思われるでしょうが、織田信長との10年にもわたる戦いを耐え抜き、直接的な戦闘ではとうとう落ちなかったこのお寺は、堅い守りの要害であり、完全に城郭です。資料によっては、石山本願寺“城”と書いてあるものもあります。

今回は、戦国史を語るうえで避けては通れない、石山本願寺のお話をしましょう。

まずは石山本願寺の位置の確認

現在、石山本願寺なるお寺は存在しません。その流れを汲む西本願寺と東本願寺が、それぞれ京都にあります。いずれも位置的にはまったく異なります。

戦国時代に石山本願寺が在ったと推定される場所は、現在の大阪城です。もともと石山本願寺の在った場所に豊臣秀吉が大阪城を築き、それを完全に埋め立てる形で徳川家康が新たな大阪城を築きました。そのため、石山本願寺の痕跡はまったく残っていないと考えられます。

と、いうわけで、現在の大阪城公園内の何処かに在ったんだなあ……ということを念頭に置いて、これから読んでみてください。

石山本願寺が築かれるまで

仏教の一派である浄土真宗は、開祖の親鸞の死後（1263年）に、幾つかの派に別れました。その中で、京都の本願寺は、親鸞の曾孫の流れを汲みながらも衰退し、他宗の末寺になるまでに転落しました。

その本願寺に、1400年代に入って本願寺8世の蓮如が現れ、他宗や他派との軋轢の中で本願寺を打ち壊されながらも、東国や北陸で布教を行い、特に北陸で勢力を増しました。北陸の門徒は、蓮如が北陸を離れた後に自治国を形成するまでになります。

蓮如はというと、北陸を離れてから京都の山科の

地に本願寺を再建して、ここを本拠としました。そして、晩年にいたって大坂（昔は“阪”ではなく“坂”の字を使っていました）に石山御坊なる坊舎を建てて（1496年）、隠居生活と布教活動の一拠点としました。これが、後に石山本願寺として発展することになります。そして蓮如は1499年に没しました。

さて、時は戦国時代です。山科本願寺も周囲の諸勢力との衝突を避けられず、室町幕府内のぐちゃぐちゃな勢力争いに加担した末に、かつては味方だった勢力に寺を囲まれ、灰燼に帰しました。1532年のことです。この後、本願寺は石山御坊に移りました。

信長との戦いの始まり

石山本願寺は、山科本願寺の焼き討ちの頃には、既に城塞化していた様です。そして、後に信長と対峙する頃には、5百数十メートル×7百数十メートルの広さ（もっと広がったという記録もあり）の敷地を土塁と堀で囲み、寺内町を取り込んで、さらに、周囲に51の支城を持つ、大城郭になります。

信長は上洛（1568年）を果たした後に、政治的、経済的、軍事的な一大勢力になっていた石山本願寺に、圧力を加える様になりました。まずは、臨時徴収の税金として、5,000貫を要求しました。戦国時代の1貫＝2石＝12万円という資料を見たことがありますので、これを信じるとすると、現在の6億円です。当時の本願寺11世の顕如は、この時はそれを支払いました。

しかし、1570年に、信長が石山本願寺に退去を要求したらしく（真偽は不明）、これに反発した顕如は、門徒に檄を飛ばして、突如として、他勢力と対峙していた織田軍を攻撃しました。ここから、10年にわたる信長との戦いが始まります。

信長による包囲網の各個撃破

第一戦は、信長側が全面衝突を避けて、ひとまず

和睦となりました。その後しばらくは、表向きは穏やかに過ぎていきますが、双方とも裏では外交戦を展開して、相手の封じ込めに力を尽くしていました。顕如は、甲斐（現山梨県）の武田氏や安芸（現広島県）の毛利氏に連絡をとって、信長の東西からの攻撃を画策しています。

信長には包囲網が形成されていました。北の浅井氏と朝倉氏、東西の武田氏と毛利氏、それに石山本願寺と伊勢長島（現三重県桑名市）の本願寺教団です。このうち、浅井氏と朝倉氏は1573年に信長に敗れて、滅亡しました（第40回一乗谷城参照）。当然ながら、朝倉氏の治めていた越前（現福井県）は信長のものになりますが、程なくして本願寺教団に奪われました。これを契機に石山本願寺と信長との間が再度手切れとなります。

この時点で、信長を囲む勢力は、武田氏と毛利氏、それに石山本願寺と、伊勢長島の本願寺教団と、越前の本願寺教団ということになります。しかしながら、本願寺教団の三拠点ですら統治体制の面では独立しており、完璧な連携がとれるわけではなかったため、包囲網は信長に各個撃破されることとなります。1574年に伊勢長島の本願寺教団が制圧され、1575年には武田氏が長篠の戦いに破れ（第3回長篠城参照）、越前の本願寺教団も制圧されました。ここに至って顕如は信長に詫びを入れて再び和議を結ぶこととなります。

木津川口海戦

1576年になって、顕如は三度挙兵しました。本願寺勢は一度は討って出て織田勢を蹴散らしますが、逆に信長の逆襲にあって、石山本願寺に籠城することとなります。そして、信長は、石山本願寺の四方に砦を築いて完全封鎖を試みました。

これに対して顕如は、毛利氏に救援を依頼し、毛利氏もそれに応えました。700～800隻の毛利水軍が、石山本願寺に通じる木津川口に殺到し、織田水軍を散々に打ち負かして、悠々と石山本願寺に兵糧と弾薬を運び込みました（第一次木津川口海戦）。

しかし、信長も負けておらず、九鬼嘉隆に大砲を積んだ鉄甲船を建造させ、毛利水軍の再襲来に備えました（第45回志摩鳥羽城参照）。1578年の毛利水軍と織田水軍の再戦は、鉄甲船の大砲で毛利方の船を打ち崩した織田方の勝利となりました（第二次木

津川口海戦）。

講和と石山本願寺の明け渡し

第二次木津川口海戦の少し前、織田方では大変な事件が起こっていました。有力家臣の荒木村重が、信長に反旗を翻したのです（第39回有岡城参照）。もし、第二次木津川口海戦の勝利がなかったら、信長側から石山本願寺側に講和を申し込んでいたでしょう。しかし、この勝利のおかげで信長は強気の状態を取ることができるようになりました。そして、1579年に村重の反乱を大方鎮圧しました。

顕如としては、兵糧や弾薬の欠乏のおそれが出てきたうえに、期待した村重の反乱が大方鎮圧されたために、和議を申し入れるしか道がなくなりました。そして、信長もこれを受け入れ、1580年に和議が成立しました。

本願寺の東西分裂の原因

講和の条件に従って、顕如は石山本願寺を退去しました。しかし、息子の教如はこれを良しとせず、しばらく石山本願寺に籠もって抵抗を続けました。結局、教如も数ヶ月後には石山本願寺を退去することになりますが、講和条件に反した教如の行動は顕如の立場を悪くし、父子の間に亀裂をもたらしました。

本願寺の後継者が誰であるのかについては、顕如の死後、豊臣秀吉の治世下で混乱し、一時教如が勤めたものの隠居させられて、存命中の顕如の意思として顕如の三男が就くことになりました。この本願寺が現在の西本願寺になるわけです。一方、教如も後に徳川家康の寄進を受けて独立し、これが現在の東本願寺となります。

最後に

大阪城公園内の石山本願寺に関わるものとしては「蓮如上人袈裟懸けの松」があります。“松”と言っても、正確には松の“根”です。これが本当に石山御坊の頃からあるものなのかと問われれば、そんなはずはない……と言わざるを得ませんが、信心深い方から見れば、一つの聖地です。

大阪城も、西本願寺も、東本願寺も、それぞれに単独で見応えのある観光スポットです。そのうえで、以上の歴史を知って観てみると、また違った楽しみ方ができるでしょう。